

ソーシャルワーク演習教育の現状と課題 — 2007 年の改正をうけて —

なか の よう こ
中 野 陽 子

〈要 旨〉

2007 年の「社会福祉士及び介護福祉士法」改正に伴い、相談援助演習に関する規定も大きく改められ、演習時間が 120 時間から 150 時間に増加し、シラバス内容も大幅に変更された。今年度をもってカリキュラム変更後の演習教育 150 時間を実施したことになる。改正後まもないため、新カリキュラム移行後の演習教育に関する先行研究はいまだ少ない。

本稿では、本学の現状に合わせて改正後の 3 年間で筆者自身が実施した 150 時間の演習教育を振り返り、厚生労働省が提示しているシラバスと照らし合わせて課題を抽出し、学生が社会福祉援助技術を習得していくためのより良い演習教育を考察することを目的とした。その結果、演習教育を実施していくにあたり、価値に関する学びが明記されていない点、事例検討方法や教材に関すること、面接技術習得方法、視聴覚教材の確保などが課題として挙げられた。

〈キーワード〉

ソーシャルワーク演習 相談援助演習 2007 年改正 演習教育

I. はじめに

1. 研究の背景と目的

2007 年(平成 19 年)11 月 28 日に「社会福祉士及び介護福祉士法」¹が改正された。この法律改正の背景には、近年の介護・福祉ニーズの多様化・高度化に対応し、人材の確保・資質向上を図ることが求められていることが挙げられている。改正により、社会福祉士の定義が見直され、従来の福祉サービスを介した相談援助のほかに、他のサービス関係者との連絡・調整を行い、橋渡しを行うことが明記された。また、義務規定の見直しも行われ、「誠実義務」と「資質向上の責務」が加わるなどした。

そして、この法改正に伴い、2007 年 3 月に「大学等において開講する社会福祉に関する科目の確認に係る指針について」²が出され、「相談援助演習」は、現行の 120 時間より

150 時間に教育時間が増加し、1 クラスの学生数は 20 人未満と定められ、演習を担当する教員に対しても資格要件が科せられるようになった。

つまり、社会福祉士のより一層の資質向上のために、その教育内容が大きく変化し、より充実した内容が求められるようになったのである。改正後の新カリキュラムで授業を受けている学生が今年度(平成 24 年度)で 4 年生となり、150 時間分の演習教育を受けたことになる。そこで、30 時間増加分の教育内容、実習前後で実施する教育内容等について、厚生労働省が示したシラバス内容の検証が必要な時期に来ていると考えた。

そこで本稿では、本学の現状に合わせて改正後の 3 年間で筆者自身が実施した 150 時間の演習教育を振り返り、厚生労働省が提示しているシラバスと照らし合わせて課題を抽出し、学生が社会福祉援助技術を習得していくためのより良い教育内容を考察することを目的とする。

なお、本学ではより「ソーシャルワーク」を学生に意識させるために「相談援助演習」ではなく「ソーシャルワーク演習」としているため、本文中では「ソーシャルワーク演習」を使用していく。なお、「相談援助実習」は「ソーシャルワーク実習」、「相談援助の理論と方法、相談援助の基盤と専門職」は、「ソーシャルワーク I ～IV、ソーシャルワーク総論 I ・ II」としている。

3. 先行研究の検討

先行研究の検索には、国立情報学研究所の情報検索サイト CiNii を使用した³。「社会福祉援助技術演習」のキーワードで検索すると 64 本の論文が抽出されるが、「相談援助演習」では 10 本、「ソーシャルワーク演習」11 本と 2007 年改正後の研究はまだあまり行なわれていない。このことは、石川(2010: 22)⁴も「これまで演習のミニマムスタンダードが確立されていなかったこともあり、研究報告や学術論文等の文献はあまりみられなかった」と指摘をしている。

実際、「相談援助演習」、「ソーシャルワーク演習」で検索された論文は、相談援助演習に演劇的手法を取り入れる試みに関する研究や自己決定の尊重を教えるプログラムに関する研究、通信教育のスクーリングでの実践に関する研究など個々の演習内容に関することであり、2007 年の改正をうけ新カリキュラムにおける演習教育について論じている論文は限られていた。

その中でも中村剛(2011: 67)⁵は、厚生労働省より示されたシラバス内容とその内容に沿って編集されているテキストを取り上げ、入所型社会福祉施設の事例掲載が少ない点、価値に関する学びがない点、対象者(児童、障害者、高齢者等)に関する学びがない点を指摘している。また、継承すべき点も挙げ、それらを踏まえ相談援助演習 75 コマの教育内容を提示し、学生が興味を持ち理解できるような相談援助演習のテキスト作成の

必要性を訴えている。

中村佐織(2010:4)⁶は、演習授業の受講生にアンケート調査を実施し、講義・演習・(実習・実践)への循環的体系的学習にむけた前提の課題、演習を受ける人の理解力やニーズに応じた教育プログラムや演習内容の検討、発見力・想像力・創造力・選択力・発想力・応用力・結び付ける力などに着目した演習展開などの課題を挙げていた。

石川(2010:22)⁷は、社会福祉士養成の演習教育の歴史をまとめ、演習教育の課題として、ソーシャルワーカーに不可欠な倫理や価値が明記されていないこと、ミクロ・メゾ・マクロの視点があまり含まれていないこと、実践モデルに基づいた演習内容が含まれていないこと、貧困以外の高齢者、障害者、児童、母子など相談援助の主な対象者になっていた人々へのアプローチもあまり含まれていないことを指摘し、相談援助の必要な知識と技術としては十分なものとはいえないとしていた。

Ⅱ. 厚生労働省が示しているシラバスの歴史的変遷

1987 年(昭和 62 年)に「社会福祉士及び介護福祉士法」が制定され社会福祉士資格取得に向けた養成がスタートした。それに伴い、社会福祉養成施設等における授業科目の目標及び内容も提示された⁸(表 1 参照)。当時より、ロールプレイの実施や実習前後での指導が求められていたものの具体性には欠ける内容であった。そのことを、寺田ら(2009:129)⁹は、「授業目標や内容をガイドラインとして指導しているのみであり、詳細な指示や例示などはない中で実施されてきた。」とし、大坂ら(2005:69)¹⁰は、「社会福祉士養成校全体の教育水準を保つために示されているが、教授法等については担当教員に任せられることになる。」と指摘している。

その後、1999 年の厚生省令¹¹により 2000 年 4 月から、演習の時間が 60 時間から 120 時間へと倍増したものの授業内容については特に指示が出されなかった。そして、2007 年 3 月の通知¹²により、「自己覚知」、「コミュニケーション技術」、「面接技術」、「アウトリーチ」、「チームアプローチ」などの習得や、援助の展開過程に沿った事例検討を行うこと、地域福祉の事例の実践、実習での個別的な体験を一般化し実践的な知識と技術として習得することなどが明記された。

表 1. シラバス内容の変遷

1988年2月	2000年4月 改正	2007年3月 改正
社会福祉援助技術演習 【目標】 1. 社会福祉の専門援助技術を、具体的な事例や援助場面を想定した実技指導（ロールプレイング等）を中心とする演習形態により、社会福祉援助技術に関する講義及び現場実習と関連させながら、個別指導ならびに集団指導を通してその精度を高めつつ習得させる。 2. 学生個々人が自分自身で学習し、考え、主体的に行動する態度を涵養する。演習のなかで、具体的に人権尊重、権利擁護、自立支援について理解し、実際に行動できるようにする。さらに、在宅での生活支援も視野に入れて理解させる。 【内容】 具体的な援助事例を体系的にとりあげるなどして、社会福祉援助技術をその援助過程を含め具体的に理解させるため担当教員による個別指導並びに集団指導のもとで、学生自身が積極的に参加できる様にすすめる。 さらに、基本的なコミュニケーション等を含めた社会福祉援助技術が学生個々人に身に着つくよう、具体的な援助場面を想定した実技指導（ロールプレイング等）を実施する。その際、次の点に留意すること。 1. 実習前においては、具体的な課題別の事例を活用し、相談援助業務に必要な専門援助技術、面接実技、記録実技、評価・効果測定実技等についての指導を行い、講義の内容を深めたり実習の教育効果が上がるようにする。 2. 実習後においては、実習総括をふまえて、社会福祉援助技術をより深めて身につけさせるようにする。	60時間⇒120時間 時間増のみ内容変更なし。	相談援助演習 120時間→150時間 【ねらい】 相談援助の知識と技術に係る他の科目との関連性も視野に入れつつ、社会福祉士に求められる相談援助に係る知識と技術について、次に掲げる方法を用いて、実践的に習得するとともに、専門的援助技術として概念化し理論化し体系立てていくことができる能力を涵養する。 ①総合的かつ包括的な援助及び地域福祉の基盤整備と開発に係る具体的な相談援助事例を体系的にとりあげること。 ②個別指導並びに集団指導を通じて、具体的な援助場面を想定した実技指導（ロールプレイング等）を中心とする演習形態により行うこと。 【含まれるべき事項】 ①以下の内容については相談援助実習を行う前に学習を開始し、十分な学習をしておくこと ア 自己覚知 イ 基本的なコミュニケーション技術の習得 ウ 基本的な面接技術の習得 エ 次に掲げる具体的な課題別の相談援助事例（集団に対する相談援助事例を含む。）を活用し、総合的かつ包括的な援助について実践的に習得すること。 ●社会的排除 ●虐待（児童・高齢者） ●家庭内暴力（DV） ●低所得者 ●ホームレス ●その他の危機状態にある相談援助事例（権利擁護活動を含む。） オ エに掲げる事例を題材として、次に掲げる具体的な相談援助場面及び相談援助の過程を想定した実技指導を行うこと。 ●インテーク ●アセスメント ●プランニング ●支援の実施 ●モニタリング ●効果測定 ●終結とアフターケア カ オの実技指導に当たっては、次に掲げる内容を含めること。 ●アウトリーチ ●チームアプローチ ●ネットワーキング ●社会資源の活用・調整・開発 キ 地域福祉の基盤整備と開発に係る事例を活用し、次に掲げる事項について実技指導を行うこと。 ●地域住民に対するアウトリーチとニーズ把握 ●地域福祉の計画 ●ネットワーキング ●社会資源の活用・調整・開発 ●サービスの評価 ②相談援助実習後に行うこと 相談援助に係る知識と技術について個別的な体験を一般化し、実践的な知識と技術として習得できるように、相談援助実習における学生の個別的な体験も視野に入れつつ、集団指導並びに個別指導による実技指導を行うこと。

Ⅲ. 本学の現状及び授業内容

1. 本学の実習、就職、学生の状況

本学では、社会福祉の現場に就職していく学生の割合が高いため、演習や実習教育は特に重要視して行なっている。そのため、演習教育について考えていくにあたり本学の实習と就職状況について示しておきたい。

本学は、調布学園短期大学を経て、2002 年に田園調布学園大学人間福祉学部を開設した。社会福祉士受験資格取得は卒業要件となっているため、毎年、人間福祉学部(社会福祉専攻・介護福祉専攻・心理福祉学科)の約 170 名の学生は相談援助実習に出て、社会福祉士取得を目指している。

実習先は、図 1 に示したとおり、高齢者関連施設が 48 % と一番多く、次いで障害者関連施設が 28 %、児童関連施設が 10 %、社会福祉協議会が 5 %、福祉事務所が 3 %、保護施設が 4 %となっている。なお、高齢者関連施設の中には地域包括支援センターが 18 % 含まれている。図を見てもわかるとおり、大半の学生が、相談機関ではなく施設での実習を行なっている状況である。

図 2 は、本学社会福祉専攻の卒業生の過去 3 年分の就職状況を示したものである。86 % の学生が社会福祉の現場へと就職をしていく。一番多い就職先は、高齢者関連施設で 37 %、次いで障害者関連施設が 28 %、児童関連施設が 2 %、その他の福祉施設が 8 % となっており、相談機関よりも圧倒的に施設での就職者が多い。就職状況は、実習状況とほぼ比例している。そのため、本学の現状と照らし合わせると、学生の将来の方向性に即した演習教育の内容を吟味し実践していくことが重要になってくると考えている。

図 1. 本学学生の実習先(平成 24 年度人間福祉学部)

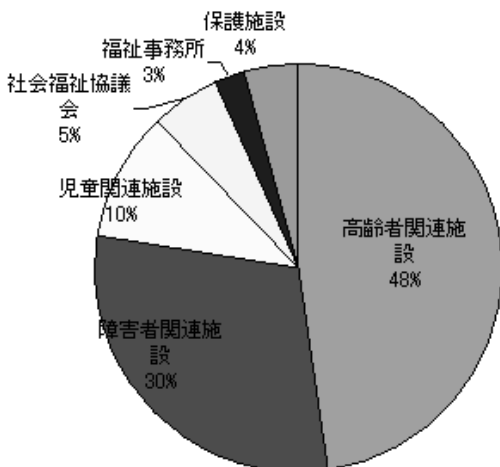
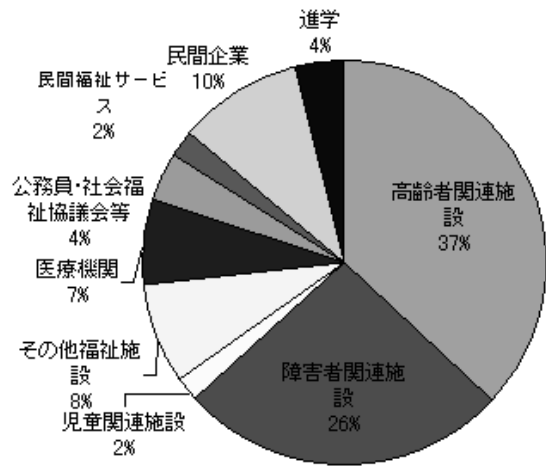


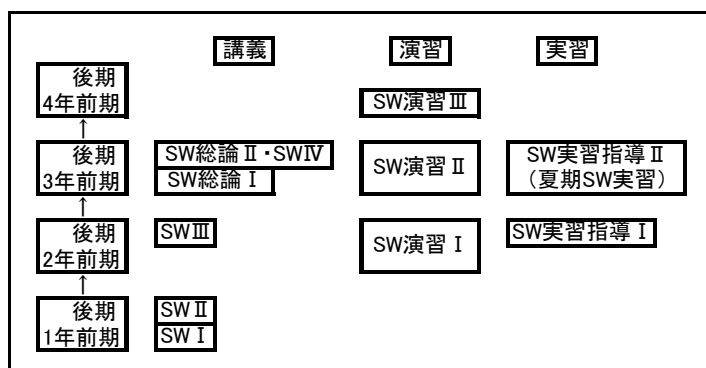
図 2. 本学学生就職先(社会福祉専攻過去 3 年分)



2. 本学のソーシャルワーク演習の位置づけ

本学におけるソーシャルワーク演習の位置づけを確認しておきたい(図3参照)。ソーシャルワークに関連している科目は、講義科目としてソーシャルワークⅠ(ソーシャルワーク基礎)、ソーシャルワークⅡ(グループワーク等)、ソーシャルワークⅢ(ケアマネジメント)、ソーシャルワークⅣ(コミュニティ・ソーシャルワーク等)、ソーシャルワーク総論Ⅰ(モデル・アプローチ)、ソーシャルワーク総論Ⅱ(スーパービジョン・コンサルテーション等)がある。演習科目としては、ソーシャルワーク演習Ⅰを2年次通年30コマ、ソーシャルワーク演習Ⅱは3年次通年30コマ、ソーシャルワーク演習Ⅲを4年次前期15コマ開講している。実習科目としては、ソーシャルワーク実習指導Ⅰを2年次後期15コマ、ソーシャルワーク実習指導Ⅱを3年次通年30コマで開講している。実習は、3年次の8～9月にかけて実施している。

図3. ソーシャルワーク関連科目の開講時期と科目名



3. ソーシャルワーク演習のシラバスと教育内容

本学では、ソーシャルワーク演習をのべ33人の教員(内非常勤4名)で担当している。共通シラバスを基本に、担当教員ごとに専門性を活かしながら柔軟に演習授業を行っている。よって、到達目標は全クラス共通であるが、そのアプローチはクラスごとに多少異なる。また、基礎学力の低い学生や福祉へのモチベーションの低い学生が多く集まってしまった、障害のある学生がいるなどクラスの状況により教育内容を変えていく必要性も生じている。クラス分けは、アドバイザーグループの学生がいつも同じクラスにならないように配慮し、演習ⅠからⅡ、演習ⅡからⅢのクラスメンバーも異なるようにしているため、演習ⅠからⅢまでさまざまな学生同士で毎年違った教員が授業をする形となっている。

本学におけるソーシャルワーク演習Ⅰ～Ⅲの75コマ分のシラバス内容を表2に示す。この内容は、厚生労働省が示した内容を網羅する形となっている。また、本学シラバスに則りつつも学生状況等を勘案し、筆者が3年間で実施してきた教育内容を表3に示した。

表 2. 本学のソーシャルワーク演習 75 コマ分のシラバス

	ソーシャルワーク演習Ⅰ(2年通年)	ソーシャルワーク演習Ⅱ(3年通年)	ソーシャルワーク演習Ⅲ(4年前期)
1	相談援助演習で学ぶことのオリエンテーション	1 本演習のねらいと授業方法・計画・到達目標について	1 事例のアセスメントに必要な技法の復習
2	ソーシャルワークにおける価値、知識、理論、倫理の理解	2 ソーシャルワーク実践の構成要素・人と環境の相互作用の理解	2 事例のプランニング、モニタリングで必要な技法の復習
3	ソーシャルワーク技術の理解 ソーシャルワークの構造	3 ソーシャルワーカーの価値、知識・理論、技術の体系的理解(1)	3 障害者の就労援助事例の検討 その1
4	ソーシャルワークの技術の理解 ソーシャルワークにおけるニーズ	4 ソーシャルワーカーの価値、知識・理論、技術の体系的理解(2)	4 障害者の就労援助事例の検討 その2
5	自己覚知 自分の価値観を知る	5 ソーシャルワークの展開(アセスメントと介入を中心に)(1)	5 高齢者の虐待事例、介護問題の事例の検討 その1
6	自己覚知 自分の感情を認識する	6 ソーシャルワークの展開(アセスメントと介入を中心に)(2)	6 高齢者の虐待事例、介護問題の事例の検討 その2
7	他者理解 利用者の価値観を知る	7 虐待やDVなど権利侵害に対するソーシャルワーク(1)(インターク)	7 ホームレス事例の検討 その1
8	他者理解 生活歴から理解する	8 虐待やDVなど権利侵害に対するソーシャルワーク(2)(アセスメント)	8 ホームレス事例の検討 その2
9	基本的なコミュニケーション技術の習得 言語コミュニケーション	9 虐待やDVなど権利侵害に対するソーシャルワーク(3)(プランニング)	9 地域住民への支援実践事例の検討 その1
10	基本的なコミュニケーション技術の習得 非言語コミュニケーション	10 虐待やDVなど権利侵害に対するソーシャルワーク(4)(援助の実施)	10 地域住民への支援実践事例の検討 その2
11	基本的な面接技術の習得 話の聴き方	11 虐待やDVなど権利侵害に対するソーシャルワーク(5)(モニタリング)	11 複数問題を抱える家族事例の検討 その1
12	基本的な面接技術の習得 話し方	12 社会的排除に対するソーシャルワーク実践(1)(インターク)	12 複数問題を抱える家族事例の検討 その2
13	ロールプレイング技法の習得 ロールプレイングの設定	13 社会的排除に対するソーシャルワーク実践(2)(アセスメント)	13 社会福祉領域の職員が抱える問題へのスーパービジョン演習 その1
14	ロールプレイング技法の習得 ロールプレイングの体験	14 社会的排除に対するソーシャルワーク実践(3)(プランニング)	14 社会福祉領域の職員が抱える問題へのスーパービジョン演習 その2
15	ロールプレイング体験から援助者、利用者を理解する	15 ホームレス、その他の危機状態にある相談援助事例	15 まとめ
16	前期の振り返りと後期概要とスケジュールの説明	16 社会的排除に対するソーシャルワーク実践(4)(援助の実施)	
17	記録の意義と目的	17 社会的排除に対するソーシャルワーク実践(6)(モニタリング)	
18	記録の種類と構成	18 低所得、ホームレスに対するソーシャルワーク実践(1)(インターク)	
19	記録の方法と留意点 記録の管理	19 低所得、ホームレスに対するソーシャルワーク実践(2)(アセスメント)	
20	記録の方法と留意点 個人情報の保護	20 低所得、ホームレスに対するソーシャルワーク実践(3)(プランニング)	
21	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ インターク面接	21 低所得、ホームレスに対するソーシャルワーク実践(4)(援助の実施)	
22	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ 面接の技法	22 低所得、ホームレスに対するソーシャルワーク実践(5)(モニタリング)	
23	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ アセスメント	23 司法福祉、更生保護に関するソーシャルワーク実践(1)(インターク)	
24	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ ジェノグラム	24 司法福祉、更生保護に関するソーシャルワーク実践(2)(アセスメント)	
25	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ エコマップ	25 司法福祉、更生保護に関するソーシャルワーク実践(3)(プランニング)	
26	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ プランニング	26 司法福祉、更生保護に関するソーシャルワーク実践(4)(援助の実施)	
27	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ 援助計画の実施	27 司法福祉、更生保護に関するソーシャルワーク実践(5)(モニタリング)	
28	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ 援助計画のモニタリング	28 成年後見制度に関するソーシャルワーク実践	
29	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ 援助計画の評価	29 地域包括支援に関するソーシャルワーク実践	
30	事例を通じて社会福祉の援助方法を学ぶ 援助計画の終結	30 権利擁護活動を含む相談援助事例	

表 3. 筆者のソーシャルワーク演習 75 コマ分のシラバス

	ソーシャルワーク演習Ⅰ(2年通年)		ソーシャルワーク演習Ⅱ(3年通年)		ソーシャルワーク演習Ⅲ(4年前期)
1	オリエンテーション・アイスブレイク	1	オリエンテーション・アイスブレイク	1	オリエンテーション・アイスブレイク
2	自己覚知①(SWの基本視点、自己覚知の意義、第一印象ゲーム)	2	ソーシャルワークの基本視点、自己覚知、第一印象ゲーム	2	ソーシャルワークの基本視点、理論と実践をつなげる① 講義・課題提示
3	自己覚知②(自分のものの見方を知る、いとこスケッチ)	3	事例検討のルール、ソーシャルワークの記録(ジェノグラム、エコマップ)	3	理論と実践をつなげる② 実習での事例を持ち寄りグループワーク
4	自己覚知③(事例から考える、ストレングスを見つける)	4	治療モデル、環境モデル、生活モデルについての理解(事例)	4	理論と実践をつなげる③ グループ発表(1)
5	自己覚知④(減り行く地球からの脱出)	5	ストレングスモデルについての理解(事例)	5	理論と実践をつなげる④ グループ発表(2)
6	自己覚知⑤(エコマップ、ジェノグラム)	6	DVIに対するSW ①(ビデオで学ぶ)	6	理論と実践をつなげる⑤ グループ発表(3)
7	自己覚知⑥(私は〇〇、人生曲線)	7	DVIに対するSW ②(インテーク、ロールプレイ)	7	事例検討① 児童 アウトリーチ、チームアプローチ
8	他者理解①(ビデオ: 認知症高齢者)	8	DVIに対するSW ③(アセスメント、集団面接) 課題: アセスメントシート作成	8	事例検討② アルコール依存症 事例理解
9	他者理解②(ビデオ: ホームレス)	9	DVIに対するSW ④(アセスメントシート確認、社会資源調査) 課題: 社会資源レポート	9	事例検討② アルコール依存症(ロールプレイ)
10	他者理解③(生活を考える)	10	DVIに対するSW ⑤(プランニング)	10	コミュニティ・ソーシャルワーク① ニーズ分析
11	他者理解④(ビデオ: 児童虐待)	11	DVIに対するSW ⑥(プランニング発表、モニタリング、DVチェック)	11	コミュニティ・ソーシャルワーク② 発表・広報誌作成
12	他者理解⑤(ビデオ: 身体障害)	12	レジデンシャルSW①(ビデオで学ぶ)	12	コミュニティ・ソーシャルワーク③ 広報誌作成
13	他者理解⑥(障害を体験する ～伝わらない～)	13	レジデンシャルSW②(エンゲージメント、アセスメント) 課題: アセスメントシート作成	13	コミュニティ・ソーシャルワーク④ 発表・まとめ
14	他者理解⑦(ビデオ: 知的障害)	14	レジデンシャルSW③(アセスメントシート確認、プランニング)	14	事例検討③ SWの価値と倫理を考える①
15	他者理解⑧(多角的な視点を養う)	15	レジデンシャルSW④(プランニング発表、インターベンション、事例を理論と結び付ける)	15	事例検討③ SWの価値と倫理を考える②
16	オリエンテーション・前期振り返り・アイスブレイク	16	オリエンテーション・前期振り返り・アイスブレイク		
17	面接基礎理論①(ビデオ: 言語コミュニケーション、傾聴の大切さ)	17	社会的排除に対するSW①(知的障害とホームレス)		
18	面接基礎理論②(ビデオ: 非言語コミュニケーション、言葉で伝えることの難しさ)	18	社会的排除に対するSW②(山谷のホームレス)		
19	面接基礎理論③(面接のプログラム学習・かわり行動)	19	社会的排除に対するSW③(若年ホームレス)		
20	面接基礎理論④(面接のプログラム学習・効果的質問) 課題: 面接技術について	20	グループワークの実践① 講義とプランニング		
21	基本的な面接技術①(面接の位置関係、傾聴練習 ロールプレイ①)	21	グループワークの実践② プランニング・チャシ作成		
22	基本的な面接技術②(面接の基本視点、事例理解と役作り、ロールプレイ②)	22	グループワークの実践③ チャシ作成・発表		
23	基本的な面接技術③(逐語録で学ぶ)	23	グループワークの実践④ 実施スケジュール作成・リハールサル		
24	基本的な面接技術④(アセスメントを学ぶ)	24	グループワークの実践⑤ 発表(1)		
25	基本的な面接技術⑤(面接の展開を学ぶ ロールプレイ③)	25	グループワークの実践⑥ 発表(2)		
26	面接技術練習①(事例 葛藤している大学生 ロールプレイ④)	26	グループワークの実践⑦ 発表(3)		
27	面接技術練習②(事例 母子生活支援施設 事例理解)	27	事例検討 視覚障害者① 事例理解		
28	面接技術練習③(事例 母子生活支援施設 ロールプレイ⑤)	28	事例検討 視覚障害者② ロールプレイ		
29	SWの価値と倫理を考える 施設内虐待	29	SWの価値と倫理を考える 施設内虐待		
30	まとめ: ビデオ(命について考える)	30	まとめ: ビデオ(人生について考える)		

4. 筆者が実施しているソーシャルワーク演習の具体的内容

筆者自身も本学のシラバスを踏襲しつつ、ソーシャルワーク実習指導Ⅰ・Ⅱや実習も担当していることから、実習前後の教育内容も意識して75コマの教育内容を考え展開している。その具体的内容について順を追って説明していく。

(1) ソーシャルワーク演習Ⅰ(2年通年)

ソーシャルワーク演習Ⅰは、本学のシラバスにおいて、厚生労働省から出されている「ねらい」のとおり「相談援助の知識と技術に係る他の科目との関連性も視野に入れつつ、社会福祉士に求められる相談援助に係る知識と技術について、実践的に習得するとともに、専門的援助技術として概念化し理論化し体系立てていくことができる能力を滋養する。社会福祉士に求められる相談援助に係る実践力の習得」を到達目標としている。そのことを具体化し、前期は主に自己覚知と他者理解、後期はコミュニケーション技術と面接技術を身につけることを目的としている。この授業は、学生たちが入学後初めて経験する本格的な演習形式の授業である。ディスカッションの機会も多くなり、そのことに高い緊張感を持つ学生も多い。

また、ソーシャルワーク演習の授業第1回目に自己PRを書かせているが、PR文の中に「人見知り」、「緊張しやすい」などのコメントが書かれることも多い。中には、演習のクラスに馴染めず単位を修得できなくなる学生もいる。そのため、学生同士の関係形成にかなり時間を費やしつつ、自己覚知にもつながっていくような演習を多く実施している。これにより学生たちの緊張感が少し和らいでくる。

第1回目では、自己紹介や名前を覚えるゲーム、「なんでもチェーン」¹³などのアイスブレイクを取り入れお互いに知り合うきっかけづくりをしている。

第2回目では、ソーシャルワークの定義を復習した上で、演習によりどのような価値、知識、技術を身に付けていくのか講義を行なう。さらに、自己覚知の意義についても講義をした上で、「第一印象ゲーム」¹⁴を実施している。この演習は、お互いのことをよく知り緊張を和らげる目的もあるが、自己開示をすること、自身の推測力について自己覚知すること、自身が他人からどのように見られているのか自己覚知をすることも目的としている。第3回目では、あるデザインを見て感想を書き出してもらう演習を行なっている。この演習では、多くの学生が否定的な意見ばかり出す。このことより、人間は肯定的な見方より否定的な見方をしやすい傾向にあることを自己覚知してもらっている。その上で、ペアになり「いいところスケッチ」¹⁵を実施。聴き手と話し手に分かれて、3分間フリーテーマで話をする。話をしたあと、聴き手だった人はカードにその人の良いところだけを見つけて書き出し渡す。この演習では、意識すれば良いところはたくさん見つけ出すことができること、また、褒められることの嬉しさを実感し、それはクライエ

ントも同じであることを学ぶことを目的としている。

第4回目では、身勝手だと思われるようなクライアントの事例より、その人のストレングスを探し出す演習を実施している。第3回目ともつながっており、安易に表面的に判断をするのではなく、どのような人であってもストレングスを見つけ出すことができるということを体感していくことを目的としている。

第5回目は、「滅び行く地球からの脱出」¹⁶を実施。この演習では、他人との価値観の違いに気づくこと、さらに相違する価値観を合わせていくことの大変さを実感することを目的としている。こうした体験は、現場に出た時にケースカンファレンス等の場面で活かされると考えている。演習を通じ、主張をせず相手に合わせるのか、自分の考えを押し付ける傾向にあるのかなど自身の傾向について自己覚知してもらっている。

第6回目では、エコマップとジェノグラムの書き方の講義および実際に記入をしてもらっている。多くの学生が、自分自身のエコマップとジェノグラムを書くことは初めてである。書き方を習得すると同時に、自身の家族関係や社会環境について自己覚知をする機会としている。

第7回目は、自己覚知の総まとめとし「私は〇〇」¹⁷と「人生曲線」¹⁸を実施している。この演習は個人ワークで行い、ここまでの演習内容をもとに自己覚知のレポートを課している。自分の性格や資質はどのような傾向にあり、なぜそのような傾向になったのか、またソーシャルワーカーになった際、その傾向はどのように活かされ、どのような点に留意する必要があるかを考えさせている。

第8回目から第15回目までは他者理解を行なっている。他者理解ではほぼ毎回視聴覚教材を使用している。児童、高齢、障害等のクライアントとソーシャルワーカー(もしくは支援者)が出てくる映像、なおかつ学生の心に響くような感動する映像をテレビ放送された番組より探してきている。実習先で関わる可能性のある対象者が出てくる映像を2年生の前期に見せておくことで、夏休み中のボランティア活動につなげさせることができると考えている。また、後期のソーシャルワーク実習指導Ⅰでは、カリキュラムの都合上、実習先理解は3コマしか時間が取れない。その中で、全施設について説明を行わなければならないため、多くは機能と役割の理解にとどまってしまい、対象者の理解にまでは踏み込めない。そのため、ソーシャルワーク演習Ⅰの前期授業において対象者理解を深めていくような授業内容の展開を試みている。

そして、すべてのビデオにおいてそれぞれ登場するクライアント、その家族の気持ちを考えさせ記入させている。人の気持ちの理解は、これから現場に出ていく上で欠かせない。しかし、学生によっては気持ちの理解が表面的で、クライアントが言葉にしたことしかわからず、その言葉の裏にある意味などを理解していく力が弱い学生や、偏った見方になってしまう学生もいる。そこで、感想シートは必ずコメントをして返却をしている。

第 8 回目では、認知症高齢者の支援の様子をビデオでみて、尊厳を大切にし、当事者の想いを理解し支援することの大切さを学ぶことを目的としている。

第 9 回目ではホームレスの支援のビデオを見て、なぜホームレスになってしまったのか、そこから抜け出すためにどのような支援があるのか学ぶことを目的としている。

第 10 回目では、生活をするということがどれほど大変なのか考えさせる演習を行っている¹⁹。ひとり暮らしをする際に必要なものとその値段、1 ヶ月暮らしていくためにかかる経費を各自で考え発表し、人により必要なものや想定している金額に差があることや生活することの大変さを理解することを目的としている。そして、出された数字を生活保護費や障害年金との金額と比較し、前回のホームレスの支援とも結びつけて、路上から脱出することの大変さや働けない人の生活について考えさせている。

第 11 回目では、親から虐待を受けた子どもが、施設での支援を受け虐待から再生していく過程を追ったビデオを見せている。このビデオでは、どんなに拒否をされてもソーシャルワーカーが徹底して寄り添っていくことでクライアントは変わっていきけること、また虐待を受けても傷を癒し夢に向かって走り出していく姿が描かれており、全ての映像の中で一番多くの学生の心に残るビデオである。ビデオの最後で、主人公の少女は施設を出て 18 歳でひとり暮らしをしていく。その大変さも前回の演習の学習で身にしみて理解しているようである。

第 12 回では、24 歳の若い青年が主人公のビデオである。自身で起した不慮の事故により脊髄損傷で車椅子生活となるも車椅子マラソンを目指していくという前向きな映像である。その障害受容の過程や家族の想いについて理解することを目的としている。

第 13 回では、実際に障害を体験する演習を行っている。多くの学生が中学や高校の総合学習の時間で、車椅子体験やブラインドウォークは実施しているようなのでここでは実施せず、手に軍手を 2 枚重ねてはめ鶴を折る体験をし、手先の不自由さとやり方を知っているのにできないもどかしさを体験してもらっている。また、昨日あった出来事を 30 字程度で書き出し、それを全て母音に変え、母音のみで相手に伝えていくことも経験させている。意思があり伝えたいことがあり一生懸命伝えているのに伝わらない悔しさ辛さを体験してもらっている。認知症高齢者、身体や知的に障害のある方などの気持ちの理解を目的としている。

第 14 回目では、知的障害者が自己決定をして夢であった花屋さんへの就職を目指し実習をしていく映像も観てもらっている。ここでは、本人の気持ちの理解にプラスして、今までと趣向を変え、ソーシャルワーカーが行っている支援のなかに「バイスティックの 7 原則」が実施されているのでそのことを探してもらっている。つまり、理論と実践を結び付ける取り組みをしてもらっている。

第 15 回目では、多角的な視点を養うということで、「窃盗を繰り返す 16 歳」、「やる気

のないホスト」、「リストラされた中年男性」など、短いフレーズからこの人たちがなぜそうなってしまったのか背景を思いつく限り考えて書きだしグループディスカッションを行わせている。すべて実在する人で、学生が考えて発表した後にその方たちのエピソードを話している。

リストラされた中年男性の事例では、実はこの男性は妻の癌闘病、死別を機に、小中学生3人の子育てと家事をしなければならず残業ができなくなりリストラされたのだが、多くの学生は、「仕事ができない」、「人間関係を築けない」などといったことしか思いつかない。先入観を持たず多角的な視点を養うことの大切さを伝えている。

前期末レポートでは、ソーシャルワークの基本視点、自己覚知の意義、ジェノグラム・エコマップの記述、他者理解のビデオよりどのビデオが特に印象に残ったか、そしてなぜ印象に残ったのか自己覚知をしてもらう等の内容を課している。

後期は面接技術を中心に学んでいく。第16回目は、オリエンテーションとアイスブレイクを実施。久しぶりの演習授業となるため、スキンシップを取り入れたアイスブレイクを実施し緊張感を和らげるようにしている。

第17回、第18回目では、ビデオ^{20,21}より面接技術を学ばせている。

第19回、第20回目では、D.エバンズら(1990:17-55)²²「面接のプログラム学習」の「焦点をあててついていく」と「効果的質問」の箇所を学生にプリントし、実際にソーシャルワーカー役とクライアント役に分かれロールプレイをしながら適切な回答を導き出させていく。適切な応答について考えていくことはもちろんのこと、学生にとって、日常会話で使用したことのないような言い回し、たとえば「そのことについてもう少しお話ししていただけますか」、「そうですか。たとえばそれはどのようなことでしょうか」などの表現を実際に口にしてみることで、その後のロールプレイにつながっていくと考えている。この回が終わった際に、面接ビデオや面接のプログラム学習で学んだことをまとめさせるレポートを課している。

第21回目では、面接をするときの位置関係(対面、90度など)を実際に座ってみながら、「実習への不安」という悩みを相談し傾聴させている。今までビデオで見てきたことと面接のプログラム学習で学んだことを実践してもらっている。ロールプレイは大変緊張度が高く、苦手意識のある学生もいるため少しずつ慣れさせていく形でプログラムを組んでいる。

第22回目から25回目までは、1つのシリーズになっている。このシリーズは、松本葉子氏²³がシナリオと授業プログラムも作成したものである。クライアントは、大学3年生の実習を控えた学生で実習に行きたいが、家計が大変そうなのでアルバイトをしなければならず、実習を取るかアルバイトをした方が良く悩んでいるという設定である。

高齢者や障害者の事例で行うのではなく、学生が自分自身に引きつけて考え、役作り

ができるようにしたほうが良いと考えクライアントを大学生とした。また、実習指導の授業も始まり、より実習への意識付けをしてもらうため実習への悩みとした。

事例の設定には、松本葉子氏と筆者とで演じビデオ撮影したものを学生に見せることで役作りをしやすいよう配慮している。そして、学生が実際にロールプレイをしたあと、良い面接例と悪い面接例を松本氏と筆者で演じたものを映像で見せその違いを考えさせている。

さらに、良い面接例を逐語録にして渡し、どこでどのような面接技法を使ったのか解説をしている。また、アセスメントの重要性を講義しアセスメントを実施させた上で再度ロールプレイをさせている。2 度目のロールプレイ時には、学生たちは格段に上手に面接ができるようになっている。

第 26 回目は、ここまで基本的な面接技術を学んできたので、事例を読んで、ソーシャルワーカー役、クライアント役、観察者に分かれロールプレイを実施している。

第 27 回、28 回目は、坂本ら(2007: 49-50)²⁴の母子生活支援施設の事例について事例検討を行ったうえで、ロールプレイを実施させている。この事例は、面接室での面接ではなく生活場面面接であり、こうした生活場面の面接も面接であることを理解させるようにしている。この時点になると学生もだいぶ恥ずかしさもなくなり傾聴の姿勢もできてくる。ロールプレイ後、クライアント役は面接でのソーシャルワーカーの対応をどのように感じたか、率直な感想を伝えさせるようにしている。しかし、学生達はロールプレイを行った後、必ずと言って良いほど正解を求めてくる。そこで、「正解ではないが参考程度に」と伝え、松本葉子氏と筆者とで生活場面面接を演じ映像で学生に見せている。実際に映像を見せることで、学生たちは面接の展開を理解しているようである。

第 29 回目では、筆者自身が勤めていた知的障害者施設で実際に起きた虐待事件を例に、学生達にソーシャルワーカーの価値と倫理について考えさせることを目的としている。先輩が自分の担当利用者さんに暴力を振るった場面を見たら自分ならばどうするかと投げかけ、倫理綱領を読み学習を進めている。

第 30 回目では、1 年の演習のまとめをし、ソーシャルワーカーは人の生活や人生を支えていく仕事であるため、「命」や「生きる」ということについて考えさせることを目的としてビデオを観させている。主人公は、重症心身障害児であり、意識もなく会話もできないのだが、そうした人の気持ちも考えて書かせるようにしている。ほとんどの学生は、前期の他者理解のときに比べ、あらゆる視点から気持ちの理解に努められるようになっているが、中には「しゃべっていないから気持ちなんてわからない」という学生もあり、演習教育の難しさを感じることもある。

後期末レポートでは、ロールプレイを行っての考察、授業全体を振り返りソーシャルワーカーとして大切だと思われることなどをまとめさせている。

ソーシャルワーク演習Ⅰについては、初めての演習授業ということもありかなりきめ細かくプログラミングしている。また、毎回全てリアクションペーパーや感想シートを記入させ、すべて添削して返却をしている。実習日誌記載の練習の意味合いを込め、記入はボールペンで、書き言葉で書くように指導をしている。話しことばや誤字がある場合は、指摘して返却をすることで1年経過後には文章力も向上する学生が増えている。

(2) ソーシャルワーク演習Ⅱ(3年通年)

ソーシャルワーク演習Ⅱは、「様々な分野、機関・組織で行なわれるソーシャルワーク実践内容を学習し、そこで活用されている社会福祉援助技術を理解して身につける。ソーシャルワーカーが自立支援や人権擁護、生活の質の迫及などの基本的視点を実践の中にどのように反映するのか、総合的かつ包括的な相談援助はどのようなものかなど実践的に学習し、必要な援助技術の体得をめざす。その過程でソーシャルワーカーが担う役割を具体的に理解する。」ことを到達目標としている。そのため、さまざまな分野の事例を意識して行なっている。また、夏のソーシャルワーク実習を意識して、前期は、実習に向けて最低限の援助技術を身につけることを目的としている。後期は、実習での経験を生かし、実践力を身につけることを目的としている。

第1回目、第2回目は、アイスブレイクや第一印象ゲームを実施しクラス作りを行う。ソーシャルワークの定義や価値、知識、技術についても再確認を行っている。

第3回目では、今後の演習の授業において批判をせず自由に意見が述べられる場となるよう事例検討のルール説明を実施。ソーシャルワークの展開過程についても復習をした上で、実習日誌記入も意識し、記録の意義や記録の書き方について講義をし、事例に基づいてエコマップとジェノグラムを書かせている。

第4回目では、基本的なモデルの理解と自身の傾向がどのモデルに近いのか自己覚知することを目的に、治療モデル・環境モデル・生活モデルについて事例に基づき学ばせている。まずは、北島ら(2006:208-219)²⁵の事例を活用し、木の成長という比較的わかりやすい事例で考えてもらう。その次に、白澤ら(2009:142-149)²⁶の事例より事例とモデルとを具体的に結びつけて理解できるようにしている。

第5回目では、白澤ら(2009:146-149)²⁷の事例を読み、クライアントのストレングスをいかに見つけられるかということを目的にストレングスモデルの理解を行っている。この他にも取り上げるべきモデルやアプローチがあると思われるが、ソーシャルワーク総論Ⅰの講義で学んでいるため、演習では基本的なモデルのみ学習することとしている。

第6回目から第11回目まではDVの事例を取り上げ、インテーク、アセスメント、プランニング、モニタリングとソーシャルワークの展開過程に沿って演習を行っている。そこで、まず第6回目では、映像を用いてDVについての理解をさせている。被害女性、

加害男性、そしてDVを目撃した子どもの視点とそれぞれが登場するビデオを見せている。

第7回目では、日本におけるDVの現状なども講義したうえで、白澤ら(2009: 240-243)²⁸の事例を活用して演習を実施している。インテークの面接場面において、共感や支持の応答を考えさせ、気持ちを理解しながら事例の逐語録をロールプレイさせている。

第8回目では、クライアントが1週間後に2回目の面接に来たことを想定し、筆者がクライアント役となり、クライアントを支援していく上でどのような情報収集を行うか考えさせ、実際に面接を展開していく。学生は全員がソーシャルワーカー役を行い、1人のソーシャルワーカーと面接しているかのように、話の流れなども意識して順番に1人1つずつ質問をさせている。話がそれてしまう質問をしたり、デリカシーのない質問をする学生もいるが、そのことは面接終了後に、面接を受けたクライアントとしての率直な気持ちをフィードバックしている。そして、実施した面接内容をもとに、アセスメントシートを作成する課題を出させている。自身で書式を考えて作成するところから学生自身に行わせている。

第9回目では、作成したアセスメントシートを持ち寄り、各グループで回し読みをし、情報内容、情報量、ストレングス、アセスメントから導き出された課題などを確認し合い、1番良いアセスメントシートを選んでもらっている。選ばれたものは他のグループにも回して参考にしてもらうようにしている。その後、このクライアントを支援していくためには、どのような社会資源が有効かを確認し、それぞれの社会資源の役割についてレポートを課している。

第10回目では、アセスメントシート、社会資源のレポートを参考に、プランニングを実施してもらう。

第11回目では、グループごとにプランニングを発表させ、コメントをしている。インターベンションは実施せず、支援実施後、いつ頃どのような点に着目しモニタリングが必要か考えさせている。さらに、自分自身がDVを受けていないか、していないかのチェックリストも実施し、他人ごとではなく学生自身に引きつけて考えさせる機会を作っている。

第12回目から15回目までは、知的障害者施設での自閉症者支援の事例を取り上げ、DVの事例ではできなかったインターベンションが中心となるよう、実際の支援ツール作成を行うことを目的としている。この事例は、筆者の経験と研修会等で学んだことを組み合わせた架空の事例である。第12回目は、自閉症の特性や支援の留意点をビデオで理解してもらっている。

第13回目では、ビデオを観ることがやめられず送迎車に乗り遅れてしまう自閉症者について短いエピソードのみを紹介し、この方を理解し支援していくための情報収集をし

てもらっている。やり方は、DVの事例の第8回目と同様に実施し、アセスメントシート作成も課している。

第14回目では、アセスメントシートを持ち寄り、回し読みをし、グループごとにプランニングを実施。時間になったら送迎車に乗ることができるような視覚的手がかりの作成を行ってもらっている。こうした視覚的手がかりの作成は、障害者施設だけではなく児童や高齢者の施設でも必要になることがあると考え実施している。

第15回目では、インターベンションとして実際に作成した視覚的手がかりを全員の前で発表してもらっている。グループにより工夫が凝らされ色とりどりのものが出来上がる。さらに、この事例を展開していくに当たり、どのような価値に基づき、どのような知識と技術を用いていたのか振り返らせている。こうして理論と実践とを結び付けていくことの大切さを伝えた上で、実習でもそのような視点を忘れずに学んできて欲しいと伝えている。

DVはフィールドソーシャルワーク、知的障害者はレジデンシャル・ソーシャルワークの事例として、それぞれの違いも意識しながら展開させている。前期中に、この2つの事例検討をソーシャルワークの展開過程に沿って実施することで、相談系、施設系いずれの実習に行った際にも少しはイメージしやすくなっているのではないかと考えている。

今年度より、多くの実習先でアセスメントシートや個別支援計画書の仮作成が求められるようになってきている。「実習に行って初めて作成した」ということにならないよう演習で作成の機会を設けるようにしている。また、実習では面接場面の同席や実際にクライアントと面接を実施することもある。そのため、1対集団での面接にはなってしまうが、演習Ⅰで学んだ面接技術も振り返り、面接の基本的姿勢や基本的な技術についてコメントしながら行っている。

ソーシャルワーク演習Ⅱでは、試験を実施している。モデルについての事例理解と演習で学んだことよりソーシャルワーカーにとって大切だと思われること等を記述させている。

後期は事例検討とグループワークを中心に学んでいく。第16回目ではオリエンテーションとアイスブレイクを実施している。

第17回目から19回目までは、社会的排除の事例を取り上げている。本学のシラバスにならうならば、この事例においてもソーシャルワークの展開過程に沿って行うことになるが、1人の事例を追うことよりもホームレスになる人には様々な背景があることを理解してもらうことが有意義だと考え、3つの視点で事例を紹介している。1つは、知的障害があることで適切な支援を受けられずにホームレスになってしまった方、2つ目は高度経済成長後、時代によって生み出されたホームレスの方、3つ目はリーマンショック後生み出され続けている若年のホームレスの方についてそれぞれビデオを見てその方

たちの生活や考え方、時代背景、現代社会の歪みなどについて理解を深められるような演習を展開している。

第 20 回目から 26 回目までは、坂本ら(2007:51)²⁹ のテキストをもとにグループワークを実施させている。この時期、ほとんどの学生達は実習から帰ってきて一回り成長している。実習場面でソーシャルワーカーがグループワークを実践している場面を見てきている学生も多い。見てきたことを実際に行うことで実践力を身につけて欲しいと考え実施している。さきほどⅢ－1 で述べたように、多くの学生は施設で実習し施設に就職をしていく。児童でも高齢者でも障害者施設でも、グループワーカーとなりクライアントの課題達成のためにプログラムを提供していく機会が多い。

第 20 回目では、グループワークについて簡単に復習をし、どのようなクライアントを対象とするか、そしてクライアントはどのような解決すべきニーズを抱えているのか、そのニーズを解決するためにどのようなプログラムが考えられるかプランニングをさせている。

第 21 回目では、プランニングの続きを行い、そのプログラム実施に向けて呼びかけのためのチラシを作成させている。チラシ作成なども現場ではしばしば求められることである。インパクト、対象者に合わせた見やすさ、文字の大きさ、イラストなど配慮する点は多く、学生達は試行錯誤しながら作成をする。

第 22 回目では、チラシを完成させ、実際にプログラムに来てもらうようプレゼンテーションを実施させている。プレゼンテーションについて学習³⁰ した上で、現場に出てからカンファレンスの司会、研修会の企画実施などプレゼンテーションの機会も多く求められるようになるため実施させている。

第 23 回目では、60 分間のプログラムを実施するための細かな動きや準備をすることなどスケジュール立案やりハーサルをさせている。

第 24 回目から 26 回目では、各グループに 60 分間をすべて任せ実際に実施してもらう。医療ソーシャルワーカーとなり「院内学級の子どもたちの交流」を企画したり、社会福祉協議会のソーシャルワーカーとなり「地域のひとり暮らし高齢者の交流」プログラムを企画したりしている。そして、発表グループ以外の学生は、それぞれ病気の子ども役や高齢者役などを演じながら、指示されたグループワークを取り組み、評価シートを記入していく。評価については、翌週実施したグループにフィードバックをしている。

第 27 回目と 28 回目は、連続で視覚障害者の事例を取り上げ、事例検討とロールプレイを実施している。この事例でも本人のストレングスに着目していくことや面接技術を駆使しながらロールプレイを行うようことを意識させている。面接場面のロールプレイは、演習Ⅰでかなり取り組んでいるものの、忘れないよう時々取り入れていくべき演習だと考えている。

第 29 回目では、演習Ⅰでも紹介している筆者自身の施設内虐待の事例を取り上げ価値と倫理について考えさせている。

第 30 回目では、演習Ⅱの総まとめをし、夢に向かって人生を変えようとしている若者が出てくるビデオを見せ、これからの将来について考えていくことや国家試験合格に向けた激励の意味合いを持たせている。

後期末試験では、社会福祉士国家試験の相談援助の理論と方法や相談援助の基盤と専門職の問題より、演習内容と照らし合わせて問題を作成し実施している。

(3) ソーシャルワーク演習Ⅲ(4 年前期)

ソーシャルワーク演習Ⅲは、本学のシラバスにおいて「実習での経験を踏まえ、社会福祉実践における相談援助の知識及び技術について、事例検討を通じて実践的能力を身につけるとともに、事例を中心にアセスメント、プランニング、モニタリングというケアマネジメントの過程を考え、実践力を養うことを目指す。」ことを到達目標としている。また、厚生労働省から示されているシラバスに、「実習後に知識と技術について個別的な体験を一般化し、実践的な知識と技術として習得すること」、「地域福祉の基盤整備と開発に係る具体的な相談援助事例を体系的に取り上げること」との記載があるため、これらの目的が達成できるような教育内容にしている。

第 1 回目は、オリエンテーションとアイスブレイクを実施。第一印象ゲームや他己紹介などを実施しクラス作りを行っている。4 年生にもなると演習の授業にも慣れてきて、2,3 年生に比べると早く緊張がほだけているように思われる。

第 2 回目では、ソーシャルワークの定義の再確認、第 3 回目から第 6 回目の演習内容に向けて講義を行っている。講義内容は、ソーシャルワークの価値・知識・技術について、ソーシャルワークの機能と役割について、ソーシャルワークの実践領域ミクロ・メゾ・マクロについてである。

第 3 回目では、価値・知識・技術グループ、機能・役割グループ、実践領域グループに分かれる。実習での事例を持ち寄り、実習内容を振り返りながら、理論と実践を結び付けていく。

第 4 回から第 6 回目は、各グループ順番に発表を行い、発表を聞くグループは必ず質問を出す形を取っている。実習内容に関する質問が多くなってしまうが、「〇〇については、調整機能ではなく教育的機能なのではないか」など鋭い指摘が出ることもある。正解があるわけでもなく、筆者自身も学生と共に考えながら行っている。価値でもあり技術でもあるような事柄や、示されているどの機能・役割にも属さない事柄、メゾとマクロの境目が分かりにくい事柄など完全に理論と実践とを結び付けられないようなこともある。しかし、EBP(エビデンス・ベースド・プラクティス)の視点は大切であり、卒業後

現場に出てプロとして働いていくにあたり、今自分が行っている実践はどういった根拠に基づいて実践しているのか説明できなければならないと考えているため、全てが結び付けられなくとも理論と実践を結びつけて考えようとする体験が重要になってくると思われる。

第 7 回目では、中川ら(2010: 61-65)³¹ の児童の事例を使用し、今まで取り上げてきていないアウトリーチやチームアプローチについて考える事例を行わせている。

第 8 回と第 9 回目は 2 週続きで行っている。アルコール依存症の事例を用い、初回は事例の理解、2 回目ではロールプレイを実施している。このロールプレイでは、ソーシャルワーカーと夫婦の面接という、1 対 2 の面接場면을体験させている。多くの学生にとっては、初めてのシチュエーションで戸惑いも多いが、現場に出てからはよくある場面であると考え取り入れることとしている。

第 10 回目から第 13 回目までは、厚生労働省のシラバスにならい、相澤ら(2010: 105-119)³² を参考にコミュニティ・ソーシャルワークの演習を行っている。

第 10 回目は、地域のニーズ分析を実施。統計資料よりニーズを読み取ることを体験させている。

第 11 回目では、分析したニーズを発表したのち、そのニーズの現状と解決に向けたプログラムを立案し広報誌を作成させている。広報誌作成は、社会福祉協議会への就職はもちろん、障害者、高齢者、児童施設いづれにおいてもソーシャルワーカーの役割の一つとして行っていくことの多い業務であるため、学生時代に経験しておくことは有意義であると考えられる。

第 12 回目、第 13 回目では、広報誌の作成と発表を行う。実際には、その後、立案したプログラム運営に向けた具体的な取り組みもさせたいところだが、時間の都合上ここまでにとどまっている。

第 14 回目と 15 回目では、演習Ⅰ、Ⅱでも取り上げた筆者自身の施設内虐待の事例を取り上げ価値と倫理について考えさせている。演習Ⅲでは、事例検討後に、虐待を受けた強度行動障害のクライアントを実際にどのように支援をしていくか個別支援計画書立案までを行わせている。

演習Ⅲは、前期末にレポートを課している。ソーシャルワーカーにとって大切だと思われる事柄の考察を中心に、ソーシャルワーク演習Ⅰ～Ⅲの全てを振り返り、厚生労働省が示したシラバスと照らし合わせ、どの点が習得できどの点に課題があるか考察させている。多くの学生は、自己覚知や面接技術、コミュニケーション技術は習得でき、事例検討も多く実施したと実感しているようだが、アウトリーチやチームアプローチ、ネットワーキングについては習得できていないと感じているようである。

IV. まとめと課題

本学のシラバスは、厚生労働省から出されたシラバスに則り忠実に作成されており、厚生労働省が求めている内容を幅広く網羅している。よって、筆者自身も可能な限り本学のシラバスに沿って行うようにしているが、中村佐織(2010:13)³³が指摘しているように、演習を受ける学生の理解力やニーズに合わせつつ、石川(2010:20)³⁴が指摘しているような倫理や価値に関する学び、ミクロ・メゾ・マクロに関する学び等も意識して取り入れた結果、75コマを振り返ってみると、自己覚知、他者理解、面接技術、グループワークに多くの時間が費やされ、インテークからターミネーションまでの展開過程すべてを実施した事例検討の機会は少なくなっていると考えられる。なお、ここに挙げた課題は、本学のソーシャルワーク演習教育の課題ではなく、筆者自身が展開している演習教育における課題であることを予め断っておく。

自己覚知や他者理解においては、「価値」の醸成も含めて行っている。しかし、厚生労働省のシラバスには、「知識」、「技術」の習得という言葉は数度出てくるが「価値」という言葉が出てこない。1988年2月の通知と比較すると「人権」という言葉も消えてしまっている。しかし、いくら事例検討を重ねても人権意識に欠けていたとするならば意味がない。また、人権意識は柔軟性のある学生時代にぜひ身につけておくべきだと考える。知識や技術は、現場に出てから習得の機会も多い。しかし、価値については現場に出る前に身につけておかなければ、大変な倫理違反を犯すことにもつながりかねない。こうした「価値」に関する学びが明記されていないことは大きな課題であると言える。

厚生労働省のシラバスには記載のないグループワークを行っているが、主に施設へ就職をしていく本学学生にとっては必要不可欠な演習であると考えている。この演習では、企画力、運営力、プレゼンテーション能力など多くの力が求められるため、これらを実践形式で学ぶことは貴重な機会であると考ええる。

上記に多くの時間を費やしているため、事例検討及び支援計画作成の機会がやや少なくなってしまう。事例検討は、筆者自身が体験した事例や映像を使用してのクライアント理解に努め、よりリアリティーのあるものになるよう心がけているが、やはり学生にとっては机上の空論になってしまうことも多い。DVも虐待もホームレス支援も更生保護もすべてに精通していることは容易ではない。

事例検討を学生にさせるためには、教員側はかなりの情報量を持っていなければ実施することは困難である。適切な情報やコメントがなされない中で、学生に事例検討をさせることは、浅薄でパッケージ化した支援へとパターン化させることにつながっていく危険性があると感じており、厚生労働省が示していることすべてを行うことへの大きな課題があると考ええる。

こうした課題に対応するためには、それぞれの専門である教員がオムニバス形式で演習授業を展開させるなど教育方法の工夫も必要ではないかと考える。しかし、それも現実には難しいことを考えると適切なテキストが必要となってくると考える。しかし、中村剛(2011:69)³⁵は「このシラバスを踏まえたテキストは、現時点では白澤政和・福山和女・石川久展編(2009)『社会福祉士相談援助演習』中央法規出版、中川千恵美・峰本佳代子・大野まどか編『事例中心で学ぶ相談援助演習』みらいの2冊と少ない。」と指摘しており、筆者自身もそのように感じている。教育テキストが少ないことも課題の一つであると考ええる。

また、現場に出れば多くの事例と向き合っていくことになる。その際に、今自分がどのような科学的根拠に基づいて支援をしているのか理論と実践とを結びつけて考えていくことの方が事例検討よりも必要なのではないかと感じている。

石川(2010:22)³⁶や中村剛(2011:70)³⁷も指摘しているが、児童、高齢者や障害者の事例を取り上げる機会が特に設けられていないことも課題であると考ええる。虐待やDV、ホームレスなど危機的状況にある方の事例ももちろん学ぶべき事項であると思われるが、まずは日常生活の中での児童、高齢者、障害者の支援の事例を学ぶ必要があると考ええる。

そして、シラバスで示された内容は、フィールドソーシャルワークに偏っているように思われる。これも、中村剛(2010:80)³⁸が、「今日に至ってもレジデンシャル・ソーシャルワークが理論的に確立していない中、入所型施設においてソーシャルワーク実習をするように求められている」と指摘しているが、レジデンシャル・ソーシャルワークの位置づけが曖昧であることが考えられる。しかし、実際には障害者施設に実習に行き、「できない作業をできるようにするためにどのように支援したら良いか」、「落ち着かない人を落ち着かせるためにはどのように支援したら良いか」といったことをアセスメントし個別支援計画書の立案を求められる学生もいる。筆者は、演習Ⅱの第12回から第15回目でレジデンシャル・ソーシャルワークの事例を取り上げているが、理論化されていない中で経験を頼りに行っているといった状況にある。こうしたことがテキストにも明記されていく必要があると考ええる。

また、面接技術の習得についてはかなり大きな課題があると考ええる。面接技術に関するビデオは限られている。事例を理解し、クライアントの気持ちになって役作りを行い、いかに面接を展開させていくか、面接技法を駆使して面接を行うことで、クライアントがどのように変わっていくのかというところまでを映像化しているものは市販されていないため、松本葉子氏とともに手探りで作成した。ある程度見本を見せていくことの意義は大きいと考えているが、素人の手作り映像ゆえ限界もあり、学生が面接技術を習得していくための方策を探求していかなければならないと考えている。

学生がよりクライアントの生活を具体的に理解していくためには、視聴覚教材の使用は欠かせないと考えている。しかし、映像を探してくることも至極困難である。映像は市販されているものが少ないため、テレビ番組からの録画に頼っているが、テレビ番組は当然のことながらソーシャルワークを意識して作成されたものではないため、数十本の番組を録画しようやく1本授業で使用できそうな教材が見つかるかどうかといった現状にある。視聴覚教材の確保も大きな課題であると考ええる。

全体を通じて、時間数が増えたことの意義は大きいと考えるが、実際にはまだ時間が不足していると感じる。内容については、具体的なシラバス内容が記されたことである程度のばらつきは改善されてくると考えるが、全てを実施することへの力量形成やテキストに関しては課題が多いと感じる。そして、教材等が揃っただけで良い教育ができるとは限らず、教員の力量形成は大きな課題となってくる。

特に、演習教育を実施していく上でクラスコントロール力は必須であると考ええる。モチベーションの高い学生と低い学生や理解力の高い学生と低い学生が混在する中で実施する演習の授業を統括していくことは容易なことではない。その場の空気感がわからずに一人で話し続けてしまう学生、人の気持ちが理解できない学生、理解しようとしていない学生への対応にも相当の力量を要する。

また、虐待やDVを受けた経験のある学生、いじめや不登校を経験した学生、身体や精神的な障害のある学生、性同一性障害の学生など多様な学生がいる中で、これらの事例も演習で取り上げるため、ある程度の配慮やフォロー体制も考えて授業を展開しなければならない。さらには、事例検討でのコメントやコミュニケーション力、面接技術等の技術を習得させていくにあたり、教員自身の知識力や経験力、感性等も反映されてくる。これらを担保し続けることも相当の努力を要すると考える。

本稿では、改正後の3年間にソーシャルワーク演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲのすべてを担当させていたただいたため、筆者自身の経験を中心に演習教育について述べてきた。今後はこれらの演習を受講した学生に対して調査を実施し、課題をより明確にしていく必要があると考える。

<引用文献>

- 1 社会福祉士及び介護福祉士法等の一部を改正する法律 平成19年法律第125号
- 2 「大学等において開講する社会福祉に関する科目の確認に係る指針について」平成20年3月28日厚生労働省社援発第0328003号
- 3 国立情報学研究所 <http://ci.nii.ac.jp/> 2012.4.1 閲覧
- 4 石川久展(2010)「ソーシャルワーカー養成と演習教育」『ソーシャルワーク研究』36(2),15-23
- 5 中村剛(2011)「相談援助演習の考え方と教育内容 ―実践力の育成に焦点を当てて―」『関西福祉大学社会福祉学部研究紀要』14(2),67-75

- 6 中村佐織(2010)「ソーシャルワークにおける演習教育の課題」『ソーシャルワーク研究』36(2),4-14
- 7 前掲 4
- 8 「社会福祉士養成施設等における授業科目の目標及び内容並びに介護福祉士養成施設等における授業科目の目標及び内容について」各都道府県知事あて厚生省社会局長通知昭和 63 年 2 月 12 日 社庶第 26 号
- 9 寺田香,尾形良子(2009)「ソーシャルワーカー教育の現状とあり方に関する一考察～本学における「社会福祉援助技術演習」の授業内容の検討～」『北翔大学人間福祉紀要』12,129-140
- 10 大坂純,廣庭裕,志水田鶴子,郡山昌明,加藤美枝(2005)「社会福祉士養成教育における実習・演習カリキュラムの具体的展開に関する研究 ～実習先施設利用者・職員、教員の協働によるプログラム作成及び試行をふまえて～」『仙台白百合女子大学紀要』9, 69-82.
- 11 「社会福祉士介護福祉士学校職業能力開発校等養成施設指定規則の一部を改正する省令」1999 年 10 月 22 日 厚生省令第 89 号
- 12 前掲 2
- 13 対人援助実践研究会HEART(2008)『77 のワークで学ぶ 対人援助ワークブック』 KUMI 12-13
- 14 澤伊三男,高橋幸三郎,小嶋章吾,保正友子編著(2004)『社会福祉援助技術演習ワークブッカー社会福祉士による実践と教育をつなぐ試み』相川書房 31-35
- 15 前掲 13 24-27
- 16 川村隆彦(2010)『価値と倫理を根底に置いたソーシャルワーク演習』中央法規 16-18
- 17 山田容(2003)『ワークブック社会福祉援助技術演習 1 対人援助の基礎』ミネルヴァ書房 19-21
- 18 前掲 17 25-28
- 19 前掲 13 44-47
- 20 松山真監修・指導(2002)「面接教育ビデオシリーズ～基礎編 第 1 巻 初回面接での信頼関係の確立」(株)メディアパーク
- 21 松山真監修・指導(2002)「面接教育ビデオシリーズ～基礎編 第 2 巻 ラポールの確立につながるノンバーバルコミュニケーション」(株)メディアパーク
- 22 D.エバンス、M.ハーン、M.ウルマン、A.アイビー著 援助技術研究会訳 杉本照子訳 (1990)『面接のプログラム学習』相川書房 17-37,43-55
- 23 松本葉子 田園調布学園大学 人間福祉学部 助教
- 24 坂本道子,丹野真紀子,一番ヶ瀬康子『社会福祉援助技術演習 (リーディングス介護福祉学 6)』49-50
- 25 北島英治,高橋重宏,副田あけみ,渡部律子編(2006)『ソーシャルワーク演習(上)』有斐閣 208-219
- 26 白澤政和,石川久展,福山和女 日本社会福祉士養成校協会監修(2009)『社会福祉士相談援助演習』中央法規 142-145
- 27 前掲 26 146-149
- 28 前掲 26 240-243
- 29 前掲 24 1-58
- 30 社会福祉教育方法教材開発研究会編(2008)『新 社会福祉援助技術演習』中央法規 163-167
- 31 中川千恵美,峯本佳代子,大野まどか(2010)『事例中心で学ぶ相談援助演習 社会福祉士養成課程対応』(株)みらい 61-65
- 32 相澤譲治,植戸貴子 ソーシャルワーク演習教材開発研究会編(2010)『ソーシャルワーク演習ワークブック』(株)みらい 105-119
- 33 前掲 6
- 34 前掲 4

35 前掲 5

36 前掲 4

37 前掲 5

38 中村剛(2010)「社会福祉施設におけるソーシャルワークの理論的枠組みと実践ージェネラリスト・ソーシャルワークを基盤とした理論的枠組みと実践ー」関西福祉大学社会福祉学部研究紀要 14(1), 79-86

＜参考文献＞

上石隆雄(1993)「ソーシャルワーク教育の現状と課題ー社会福祉援助技術演習を中心にー」『鹿児島国際大学 季刊社会学部論集』11(4), 1-23

社会福祉士及び介護福祉士国家試験の在り方に関する検討会(2008)「社会福祉士及び介護福祉士国家試験の今後の在り方についてー20回の実績を踏まえた検証と新カリキュラムへの対応ー」

社会福祉士養成校協会(2007)「社会福祉士養成にかかる社会福祉援助技術(相談援助)関連科目の教育内容及び教員研修プログラムの構築に関する事業 事業報告書」

日本社会福祉士養成校協会編集(2009)『相談援助演習 教員テキスト』中央法規

北條蓮英,大塩まゆみ,小林明子,齋藤正一,隅広静子,日根野建(2008)「全国社会福祉教育セミナー参加報告書」福井県立大学看護福祉学部